薔薇ジャムのパン屋

文・小原麻由美
絵・小島加奈子

空を覆い隠すほどのモッコウバラのアーチをくぐって、低い石段の階段を3段上がると、白木造りの可愛らしいお店がありました。松葉色のドアを押し開けると、チリリーンとドアベルが鳴りました。

白髪交じりの夫人が、不安そうに目をキョロキョロさせて店の中をのぞいています。

「いい匂い」

夫人は目を細めて微笑みました。

「いっらっしゃいませ」

カウンターの奥から、空色のエプロンをした笑顔の美しい店員が出てきました。

「ここは……薔薇園のはずでは？」

うかない顔で店の中を見わたす夫人に、「1年前からパン屋をやっています」と、店員は答えました。

「そうなのね……」

夫人はカウンターの椅子に腰をおろしました。

「私また、帰り道を忘れてしまったみたい」

夫人はポツリとつぶやきました。

「それはお困りですね。お名前を教えていただけますか？　どなたかご家族は？」

店員はそう言いながら、紅茶用のポットにお湯を注ぎました。

「私の名前は新緑と言います。息子がいます」

「息子さんのお名前は？」

「息子の名前？　ええっと……」

新緑さんは恥ずかしそうに、うつむきました。

「最近……いろいろ忘れてしまうんです」

「息子さんの名前を思い出すまで、お茶とパンを召し上がりませんか？」

店員は温かい紅茶を注ぎ、新緑さんに勧めました。

「焼き上がったばかりのジャムパンですよ」

店員はこんがりと焼きあがったパンをトングでとって、お皿の上に乗せました。

「そうだわ！　ジャムパンは息子の大好物なの！」

新緑さんは紅茶をすすり、パンをほおばりました。

「なんていい香り。それに懐かしい味」

新緑さんは、うっとりと微笑みました。

「店の裏庭で育てている、食用薔薇の花びらでジャムを作っています。パンは店のオーナーが、長年研究して完成した酵母菌を使っているんですよ」

店員は裏庭が見える小窓のほうを指さしました。

「もしかしてマリアかしら？　この薔薇の香りは……」

「そう！　鮮やかなローズ色のマリアです」

店員は少し興奮気味に答えました。

「私も薔薇の花びらをジャムにして、息子のためにジャムパンを作るのよ。息子はね、化学が得意で研究ばかりしているの。その上、とっても優しいの」

新緑さんは目をキラキラと輝かせて話ながら、ジャムパンをすっかり平らげました。

「自慢の息子さんですね」

店員は新緑さんのカップに紅茶をつぎ足しました。

チリリーンと、ドアベルが鳴りました。

「お母さん！」

白衣をはおった男性が、店に駆け込んできました。

「あら？　陽光！　ここがよくわかったわね」

男性は名前を呼ばれた瞬間、その場で立ち尽くしました。じっと新緑さんを見つめ、目を潤ませました。

「そりゃわかるさ。お母さんの薔薇園があった場所だからね」

男性は新緑さんの肩に手を置きました。

「やっぱり、ここって薔薇園よね？」

新緑さんは首を傾げました。

「そうだよ。でもお母さんが薔薇を育てるのは難しくなったから、薔薇園を小さくして、僕が好きなジャムのパン屋さんをやろうって話したよね？」

「そう……そうだったわね」

新緑さんは、うなずきました。

「息子さんがお迎えに来てくれてよかったですね」

店員は、男性の顔を見て頭を下げました。

「ええ、息子の陽光です」

新緑さんはうれしそうに答えました。

「陽光の好きなジャムパンを買って、うちへ帰りましょう」

「うん、うちへ帰ろうね」

陽光さんは、新緑さんの背中をトントンとさすりました。そしてジャムパンの入った袋を抱えて、無邪気に笑う新緑さんを見つめながら言いました。

「お母さん、ありがとう」

（おわり）

文　小原麻由美　1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」（PHP研究所）、「キュンすけのおくりもの」（三恵社）がある。

絵　小島加奈子　1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。